

# 資料 7

## 上杉氏と長尾氏

もともと京都の公家の出であった上杉氏は、建長4年(1252)宮將軍宗尊親王に従って鎌倉に下って以来在地化し、足利尊氏の母方の実家として足利一門では重きをなし、建武中興後の南朝北朝の動乱でも終始尊氏の信頼する軍として、新田義貞の分国である上野・越後に進撃した。当時の上杉氏は憲房・憲顕父子の時代で、越後の南朝方(新田方)を一掃し、その後の足利氏内部の尊氏とその弟直義との争いである観応の擾乱(1350-1352)等を戦いぬき、足利基氏のもとで憲顯は関東管領ならびに上野・越後の守護に任ぜられた。一方、長尾氏は相模国の鎌倉に近い長尾庄の豪族であったが、源頼朝が伊豆での挙兵の際には平家方につき、鎌倉幕府時代は日陰のくらしで、その後も浪々の身となっていたが景為の時代に上杉氏の被官となり、南北朝の戦いには上杉氏の臣として各地に転戦したのが長尾景忠・景恒兄弟であった。戦いが一応終わって、主家上杉氏の憲顯が上野と越後の守護に任ぜられ、その代官として景忠系は上野国に配置され白井長尾氏の祖となり、景恒系は越後に配置された。

その後、越後の上杉氏支配体制は紆余曲折を経て、上郡には現上越市直江津に守護館が置かれ、中郡には米山を越えた柏崎市上条に、下郡(阿賀北)の押さえとして笹神村笹岡の山浦にそれぞれ一族を置いた。上条上杉氏と山浦上杉氏の誕生となるのである。さらに、府内の西の備えのために、糸魚川市早川郷に配置されたのが山本寺上杉氏となる。

長尾氏は上杉氏の代官として、守護館のすぐそばの春日山に高景が入り、その家系は代々の守護代を勤め、高景の弟の景春系からは越後の中央を押さえる長岡市蔵王堂と、上野国と接する関東への玄関口である六日町坂戸に配置し、それぞれ古志長尾氏・上田長尾氏の始祖となる。

時代は下って16世紀に入り、守護代についた長尾為景は、守護上杉房能の養子定実を守護職に擁し、府中から逃げだした守護房能を松之山町の天水越で追い詰め、自害させた。下克上による越後の戦国時代の始まりである。

関東管領上杉顯定は権威回復のため大軍を率いて越後に攻め込んだが、為景の府内・古志・上田の長尾一族の結束による巻き返し作戦によって、顯定も六日町長森原で打ち取られ(1510年)、これを契機に上杉氏の越後支配は国人とそれをまとめる長尾氏に移っていくのである。そして天文19年(1550)上杉定実が死去し、長尾景虎が実質上の越後の国主となった。

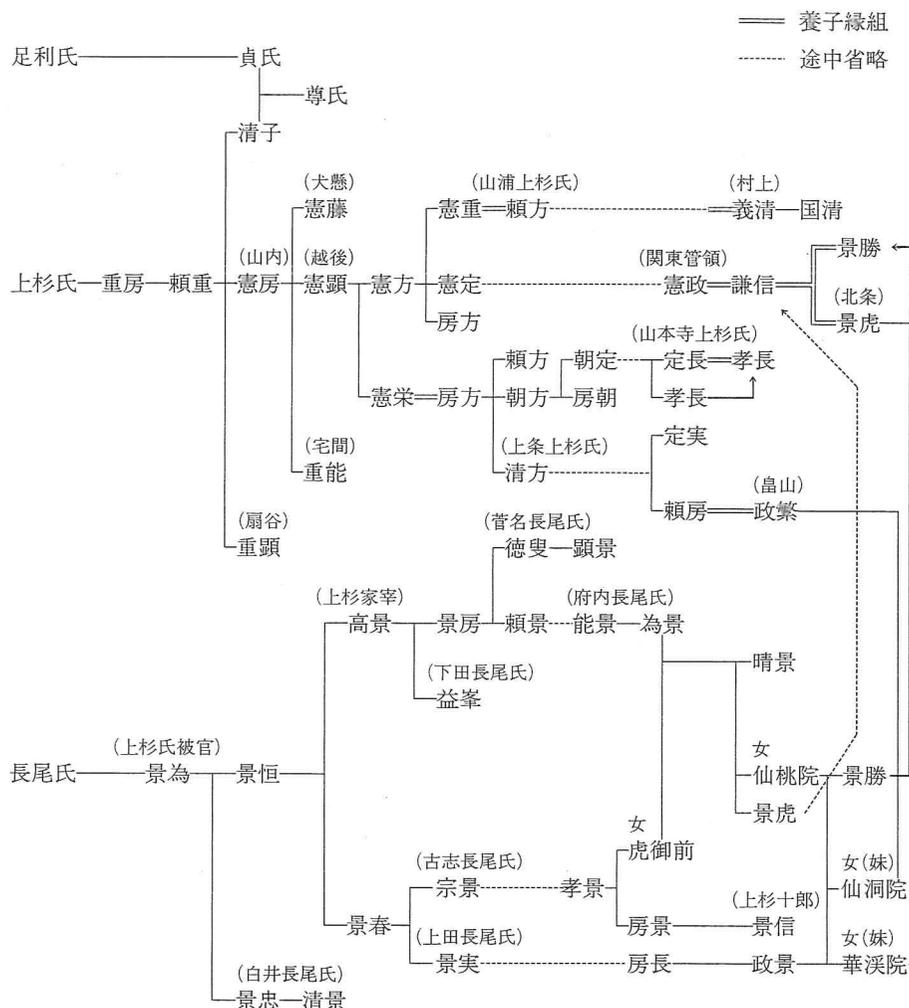
一方、関東における管領上杉家も、顯定以降憲寛・憲政と管領職につくが、相模小田原に興った北条氏に侵食圧迫され、遂に居城平井城を捨てて(1552年)越後に亡命し、長尾景虎を頼り、その後景虎に上杉家の家督を譲渡した(1557年)。

上杉氏が憲顯以来200年近く守ってきた関東管領職と、その間、臣下としてけじめをつけてきた長尾氏に名跡を譲らなければならなくなったのは、時代の流れであったのであろう。

景虎は永禄4年(1561)小田原城に北条氏を攻め、その足で鎌倉の鶴岡八幡宮に拝賀し関東管領就任を報告、名を上杉政虎(8か月後輝虎)と改め、その9年後の元亀元年12月輝虎改め謙信と号し、上杉謙信が誕生した。

天正6年(1578)3月49歳で謙信が亡くなると、二人の養子景勝(上田長尾氏出身)と景虎(小田原北条氏出身)の相続争いである「御館の乱」で、春日山城実城を先に手中に納めた景勝が勝ち抜き、天正7年越後の国主についた。(以上両氏略系図参照)

### ■上杉氏と長尾氏略系図

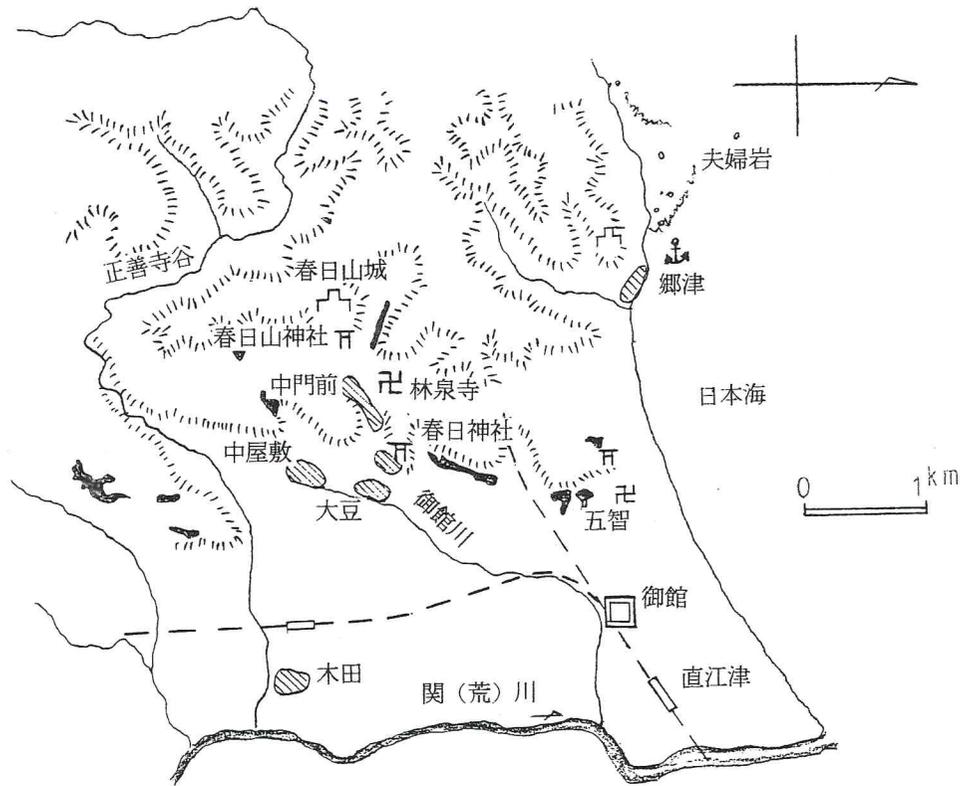


# 1. 春日山城

春日山は標高180m弱の小高い山であるが、その最高峰を中心とする標高130m以上の山容は、上越市大豆・中屋敷付近から遠望すると「かぶとのいただき」のように見える。古くはこの姿形から鉢ヶ峰と呼ばれ、いつの頃かここに築かれた山城も鉢ヶ峰城と伝えられていたのが古文書等にみられる。

現在、上越市春日（大豆と林泉寺のある中門前との中間）に鎮座する春日神社は口伝によると（慶長年間の火災で旧記を焼失）、古くは鉢ヶ峰山上にありと。また、一説には上杉房定が文明年間（1469-1487）に奈良の春日神社から分霊し、城の鎮護の神としたとも言われ、その頃から春日山と呼ばれるようになったと伝えられている。

御館と春日山城の位置図



世は下克上の時代に入り、越後の守護代長尾為景が守護上杉定実にとってかわろうとしていた永正10年(1513)10月13日、守護方である上条定憲と宇佐美房忠（現柏崎市）を攻めている際に、守護定実は閉じ込められていた府内の館を出て春日山城にたてこもった。急いで帰った為景によって定実は荒川館に幽閉され、事実上国主の実権を為景が手に入れることになったが、この時の記述に初めて春日山城の名称がみえることから、この頃から春日山城と呼ばれるようになったとも考えられる。

守護上杉氏の府内の要害として守護代長尾氏があずかっていた春日山城は、長尾為景が国主の実権をにぎることによって、越後国の政治・軍事の中心として、この時以降整備されていくが、その当時は中世の代表的な城郭様式である根小屋と要害から成り立っていた（後掲の春日山城縄張略図参照）。



御館跡……一部が小公園になっている。



春日山城跡……謙信公銅像建立時石垣がつくられた。

天文5年(1536)8月為景は長男晴景に家督をゆずり、同12月没するが、その晴景も越後一国を治めることができず、天文17年(1548)12月弟の景虎（後の謙信）に春日山城を明け渡し、ここに謙信時代の春日山城が始まる。

この後の春日山城は景虎が越後一国を統一し、関東・信濃・北陸に勢力を拡大するとともに整備拡張されていった。

城 普 請 の 記 録

永禄3年(1560)……関東出陣にあたり普請を命ず。  
 同 5年(1562) 2月……武田に備えて普請と死守を留守将たちに命ず。  
 同 5年 8月……藏田五郎左衛門あて「大門・大手門何も急渡可申付候」。  
 同 7年(1564) 7月……坂戸城主長尾政景死す。その子喜平次顯景（景虎の甥）を養子とする。実城から山なみの中に入った所に築城を命ず。後の「景勝郭」である。  
 同 13年(1570) 3月……北条氏秀（小田原北条氏）を養子とし景虎の名を与え、二ノ郭に館を造営し住まわせる。後の「景虎郭」である。  
 元亀4年(1573) 5月……実城・二ノ郭・三ノ郭の塀普請を命ず。

弘治2年(1556)から永禄元年(1558)にかけ越後国にくすぶる内紛を収め、家臣統制を強化し統一をなしとげた景虎は、翌永禄2年上洛し、関東管領就任の許諾を得たときから天正4年(1576)9月能登国七尾城を攻め落とし、翌天正5年加賀で織田軍を敗る間の20年は、景虎改め謙信の絶頂期であり、春日山城も拡張整備されていったことが、これら記録からうかがわれる。特に長尾政景が亡くなった後、その子喜平次（後の景勝）を養子とし、長尾一族の中での最右翼であり、強い団結力を誇る上田衆を住まわせるための築城や、小田原北条氏からの養子景虎のために二ノ郭を拡張し館を造営することからもわかるように、領域拡大と共に在地土豪等を家臣団に組み入れ、彼らの屋敷地を確保のため城域を拡張し、中世の山城（要害）から近世城郭型へと移り変わっていった。その結果は、平面プランで同時代の安土城や、毛利の郡山城をしのぐ、わが国一の規模をもつ壮大な春日山城ができあがった。



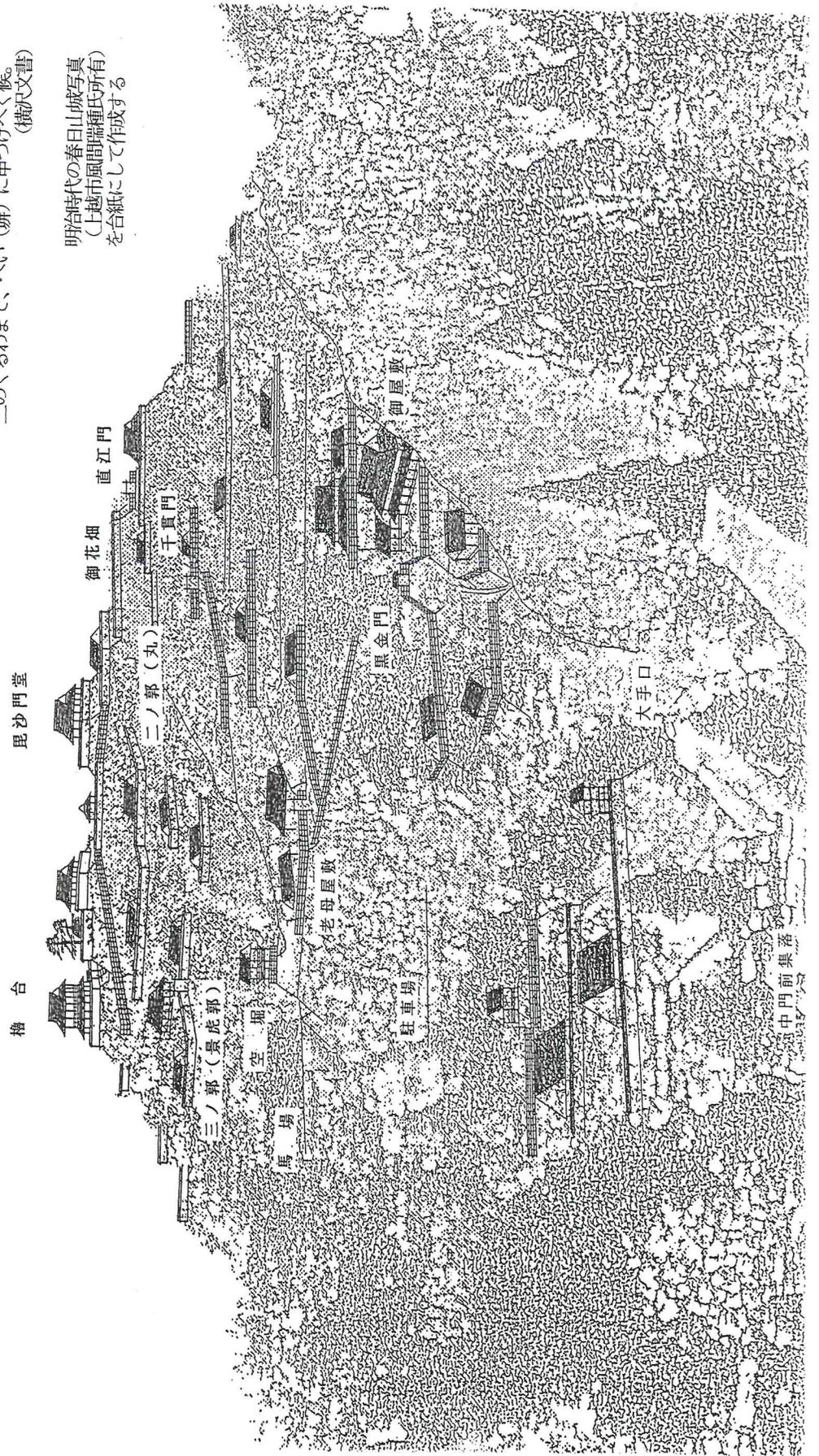
駐車場に建つ春日山城跡案内図

特に、城の完成期である元亀4年(1573)5月に長年の宿敵であった武田信玄が亡くなった（元亀4年4月12日）のを確認した後にもかかわらず、実城・二ノ郭・三ノ郭に塀の普請を命じているが、防備のためだけなら、当時一般的であった柵の設置か土塁を設けることで事足りるのを、わざわざ塀と限定して指示しているのは、城外から遠望したときの関東管領、または天下に雄飛する上杉謙信の居城としてふさわしい眺めを意識したとしか考えられない。現在の春日山は松や杉等樹木に覆われているが、当時は城域には樹木は少なく、又周辺の山や野も、多数の人々の住むための燃料や建築材として伐採され、裸山であったと考えてよいので、城外遠くからでも実城の塀を中心に二ノ郭・三ノ郭（景虎郭）と三段に塀が見えるのは壮観であり、堅城であることを見せつけ、城下領民には誇りをもたせ、他所から来た人は驚きをもって観たこと

天正元年塀普請後の春日山城（想像図）

天正元年（1573年）5月14日謙信公命ずる  
 ふしん（普請）心やすく候て、けんこ（堅固）に  
 みちやう（実城）は申に於よはす、二のくるわ、  
 三のくるわまで、へい（塀）に申つけへ候。  
 （横沢文書）

明治時代の春日山城写真  
 （上越市風間謙信氏所有）  
 を台紙にして作成する



であろう。

天正6年(1578)3月天下に雄飛すること目前にして謙信が49歳で倒れる。突然の脳出血による病没のため後継者は明らかでなく、二人の養子景勝と景虎の跡目相続の争いに越後一国が入った(御館の乱)。

景勝は、景勝郭に隣接する実城をいち早く押さえることにより、城中の水の手と軍用金を手中に納めた為、二ノ郭下の景虎屋敷は上から攻撃される劣勢から、景虎は城を出て御館に入るより方法がなかった。

御館の景虎を急援のため、武田勝頼は天正6年5月29日信濃から越後に手勢3万人を率いて入り春日山城に迫った。しかし、勝頼は戦うことなく景勝と和議を結び8月28日領国に帰ることになるが、この時景勝は1万2千両の黄金を贈って和を結んだと伝えられている。(1万2千両の黄金については確かな証はない。)

越後に入った勝頼は、大出雲原(現新井市小出雲)に本陣を置き春日山城の攻撃準備を始めた。まず景虎のこもる御館と連絡をとり、景勝の陣春日山を調べるとともに、自分自身もその目で確かめたことであろう。

甲州軍の前面にあるのは、上杉謙信が武田信玄亡き後、天下の耳目が春日山に集まることを意識して整備した大きな城郭であった。実城を中心に二重三重に塀をめぐらし、その周囲には階段状に家臣団の屋敷が連なり、その規模の雄大さに、勝頼自身甲斐の要害と比較して大変驚いたことであろう。

ちなみに、甲斐の要害は現存する遺構から見ても中世の古い要害そのままであり、その城域は4万6千平方メートルに対し、春日山城は近世城郭に近い構造になり、その城域は33万平方メートルもあり、その規模は比較にならない。

勝頼率いる甲州軍は3万と伝えられるが、おそらく信州の軍も合わせて、その実数は半分程度であったであろう。春日山城の攻め口は幾つもあり、この程度の軍勢では攻めきれず、短期決戦は不可能と判断し、戦意を失い和議の道を選んだのが真相でなかろうか。

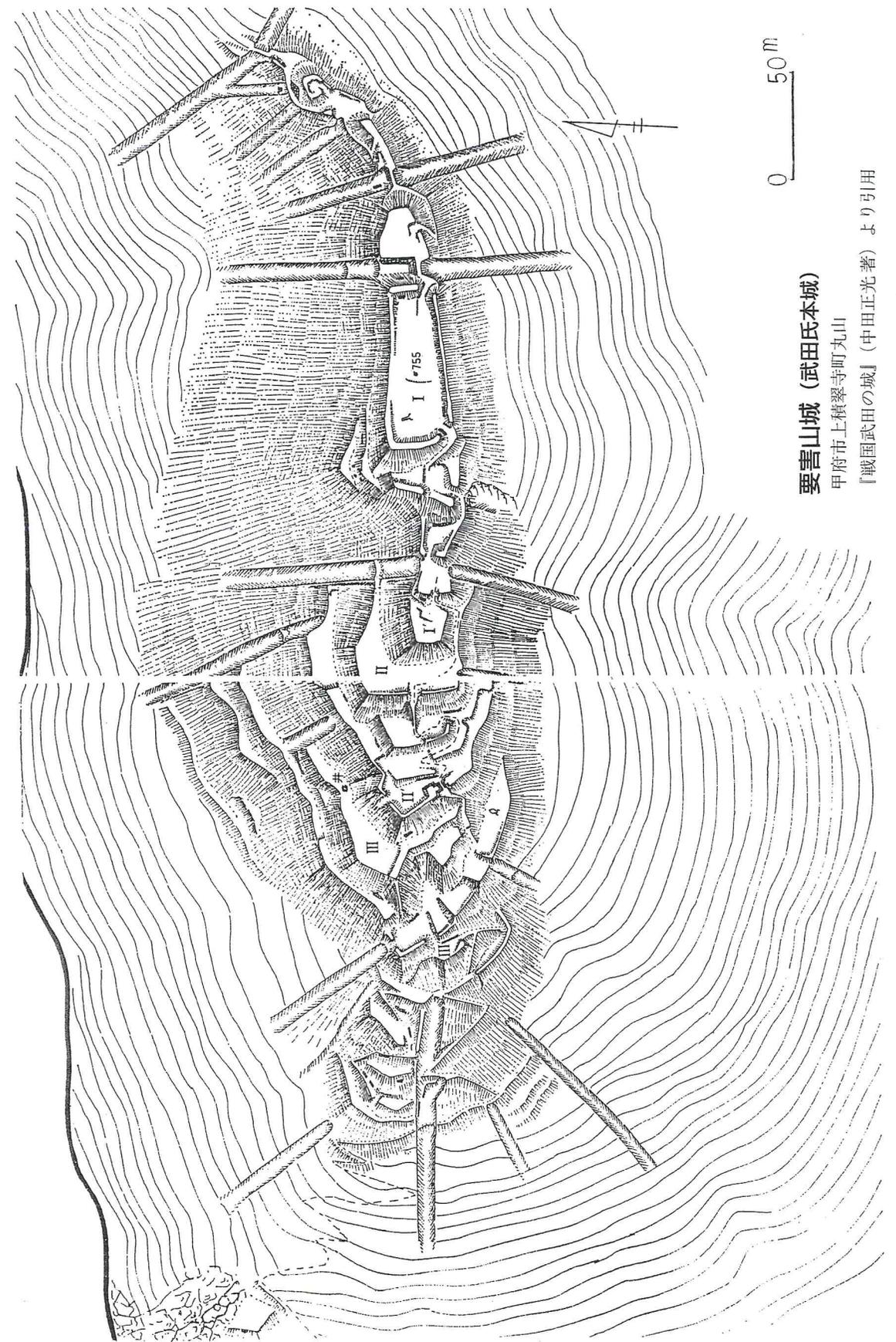
ここに新潟県史に記載されている講和の条件を次に示すが、勝頼が金によって買収されたと伝えられることと相当異なることが判る。

#### 講和の条件

- (1) 景勝から勝頼に500両を贈る。
- (2) 東上野国を勝頼に割譲する。
- (3) 勝頼の妹を景勝の内室にする。

この和議が原因で、景虎の出身である小田原北条氏と武田氏の同盟関係は急速に冷え、翌天正7年には決裂する。そして間もなく武田氏にとって本国甲州に次いで重要な駿河国が、三河の徳川氏と小田原北条氏とによって東西から攻められるようになった。天正8年にはいり駿河防衛の重要拠点である遠江の高天神城も孤立したが救援できず、勝頼は本国の防衛体制を整えるのに懸命であった。

守りの態勢に入った勝頼は、2年前に越後に攻め入った時の春日山城が強い印象として残っており、多くの家臣とその一族や人質も収容できる規模の大きな城(新府城)



要害山城 (武田氏本城)

甲府市上積翠寺町丸山

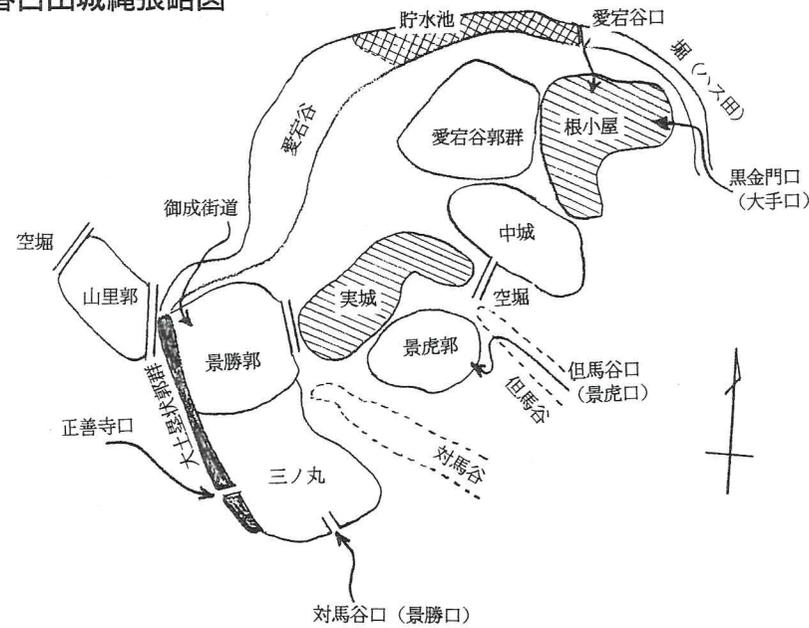
『戦国武田の城』(中田正光著)より引用

を築くことになる。それは翌天正9年正月明けから工事に着手し、同10月に完成するという急ぎぶりで新府城を一応築城するが、大きな城にふさわしい守備体制の整わない3か月後の天正10年2月織田信長勢と、それに呼応する徳川・北条勢が一斉に攻撃を始め、同年3月3日には新府城を守備する兵も居らず、城を捨てなければならなくなった。守りの態勢に入って築かれた城と、天下に向けて誇示するために整備された城との違いがここにみうけられる。

### 春日山城の縄張

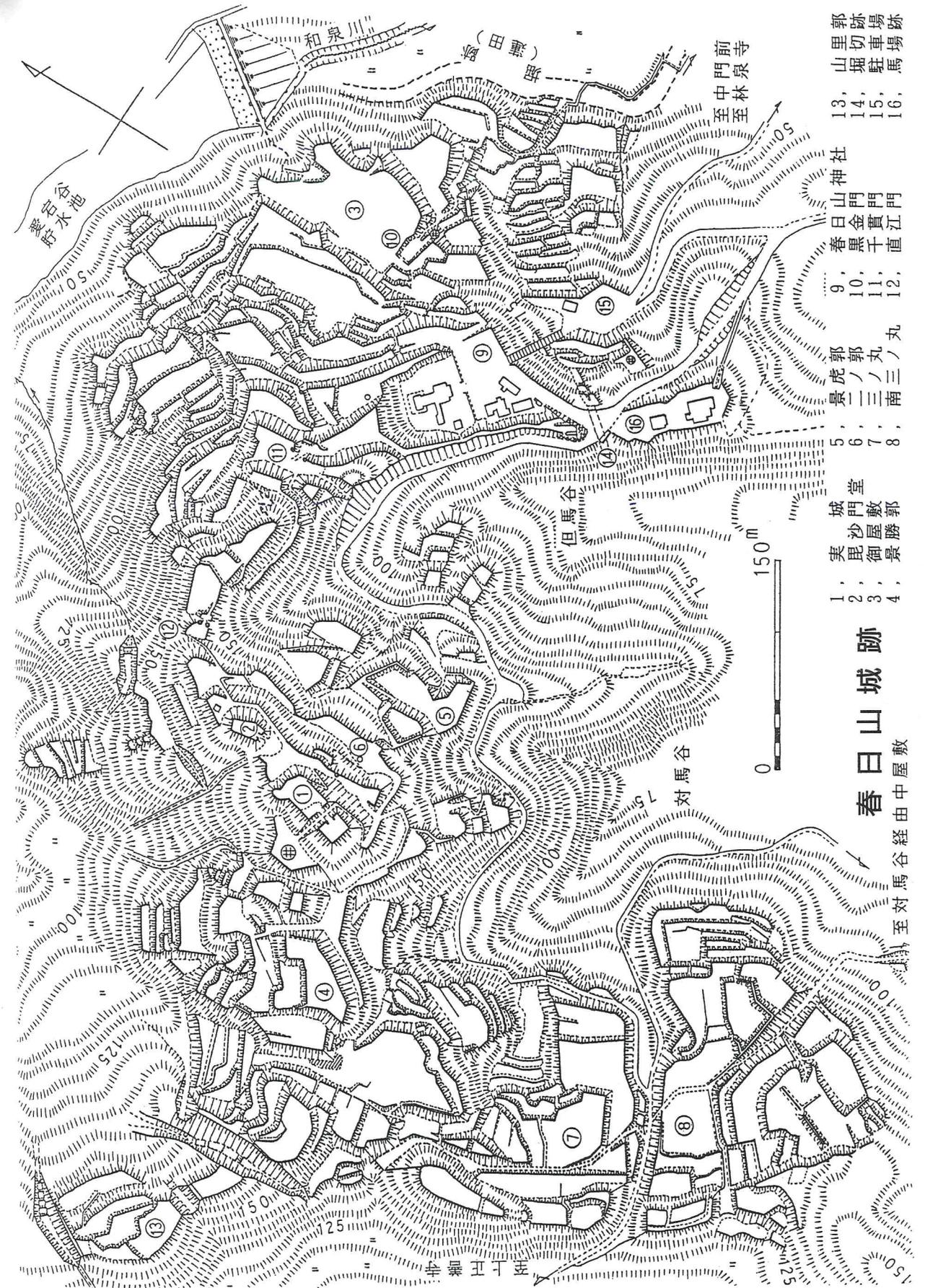
春日山城は中世城郭の根小屋地区と要害（実城）から出発し、上杉謙信の勢力圏が拡大するとともに拡張され、春日山全体が城郭となったため、当初から計画的に縄張りされた近世城郭とは異なり、非常に複雑な構造と配置になっている。

春日山城縄張略図



春日山城の北側は林泉寺門前から西に向かって愛宕谷が深く入り込み、その先は南に折れて、先端では城西の三本の堀に連なり、城の北と西の天然の堀をなしている。また、西から南にかけては正善寺谷に面する尾根を削りだし高さ10mから20m、長さ約500mに及ぶ大城壁（大土塁状郭群）に加工している。

城の正面にあたる頸城平野に面した東南方向には但馬谷と対馬谷が城地深く食い込んでいる。春日山城の実城に向かったの通路は、愛宕谷を含めたこれら三つの谷を経由して設けられており、縄張略図では「大手口」・「景虎口」・「景勝口」で表している。これらは時代によって重要度も変わっていったことであろう。



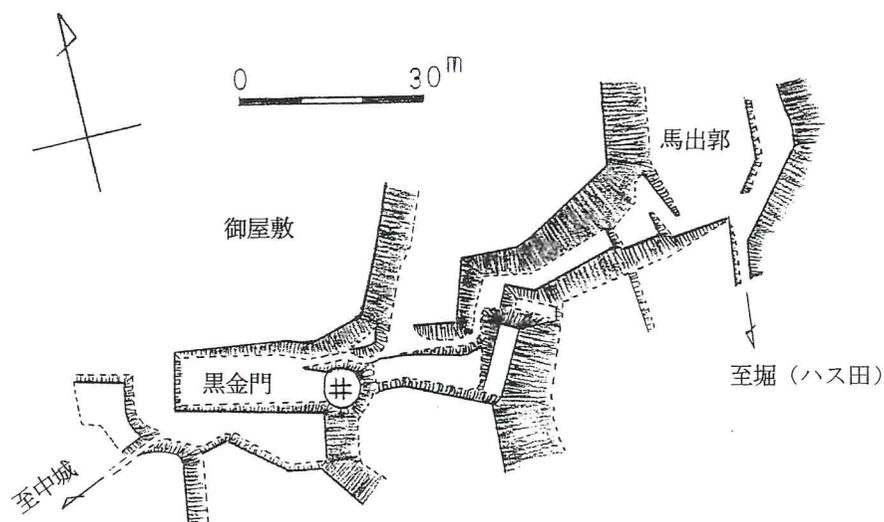
春日山城跡

至対馬谷経由中屋敷

### 御屋敷（旧根小屋）

三本の通路のうち最も古くから使用されていたのが愛宕谷の道である。ここは谷の田面から比高にして10mから20m、標高50mから60mの高さで、当城で最も大きい南北105m、東西58mの郭（御屋敷）と、5m上部にあり南北100m、東西35mの郭（右近畑）があり、古くは根小屋地域と考えられ、御屋敷の北と南には虎口跡もはっきり残っている。この二つの虎口とも内枳形で造られており、特に南の方の虎口は黒金門と現在も呼ばれている。この門に通じる坂路は途中にカギ型や直角に曲がる等、工夫された構造になっており、馬出郭を経由して堀端（蓮田）まで連なっている。また、この箇所（大手口）の左右の郭は田面から10m内外の削崖による城壁であるため、外側に幅10mから15mの堀が設けられており、現在も蓮田ではっきり確認できる。これら現存する遺構から当城の大手道と位置づけられる。

### 黒金門付近図



堀跡は今は蓮田になり堰堤の下まで続いている。蓮田の幅は10mから15mで、その右上10mに馬出し郭がある。

一方御屋敷の北の方の虎口は、愛宕谷をせき止めた用水池の堤付近から、急坂を登り詰めた所に設けられている。「越後古実聞書」に御館の乱当時の春日山攻撃記述に、「搦手の上に大堤あり」と記されており、その当時から現堤よりは規模が小さいが堤が造られ、城の北側方面の防備の堀と田の用水を兼ねた貯水池が

存在していた。現在は、古い堤は確認できないが、堀の跡は現堰堤の下まで続いており、間違いはないであろう。

### 愛宕谷郭群

御屋敷より5mの段差で上部にある郭は通称「右近畑」と呼ばれ、御屋敷に次ぐ大郭であるが、この背後の愛宕谷に面する斜面には数多くの郭が階段状に設けられている。

この区域は根小屋・中城・直江郭の背後になり、北側は愛宕谷を締め切った水堀で守られ、春日山城の中で最も安全な場所となっている。

郭は大別して三段に分けられる。最下段の郭群は、右近畑郭とほぼ同じ高さで、愛宕谷沿いに帯曲輪状に連なる（幅5mから7m、長さ130m）ものから、その下方、愛宕谷の水辺近くまでのもので、その中心郭は70m×20mである。

中段の郭群は、右近畑郭の北西端から愛宕谷沿いに約50m、高さにして10m登る路に続くもので、その取り付け部は幅6mの縦堀で切断されている（平時は橋が架けられている）。そこは下の郭群より10m高い場所で、幅12m、長さ50m規模の郭が二段に、それを中心として付随する郭が階段状に設けられている。特に縦堀を渡った所からは中城に登る路があり、根小屋と実城を結ぶもう一本の通路となっている。

最上段の郭群は、中城千貫門の郭より6mから7m低い下の郭に連なるもので、東から北に迂回しながら実城を守ようとして100m以上設けられている。その先は、実城側は15mを超える急崖で人が登るのは不可能となっている。

これらの郭群は、根小屋・中城の背後に設けられた安全地帯であり、また、通称「上臈屋敷」と呼ばれる郭もあり、根小屋（御屋敷）を支援する郭群といえる。

### 中城

御屋敷の郭群からは幅4mから5mのゆるやかな坂路で結ばれており、その大きさ位置からして、現在の春日山神社境内の郭が完成時の春日山城の最も重要な郭であり、「頸城郡誌稿」には謙信・景勝・堀久太郎屋敷とあり、現在は老母屋敷とも言われていることから、謙信・景勝時代の居館のあった郭で、その後堀氏にも引き継がれ、直江津に新城を築いて移るまでの藩主館の最も有力な郭である。

春日山神社の建立は明治34年で、工事のため原状が一部破壊されているが、幅50m奥行き37m（神社本殿が建つ）と最大幅70m奥行き35mの上下二段の区画からなり（段差は約0.50m、これは神社建立前から）、正面にあたる東南方向は御館をはじめ



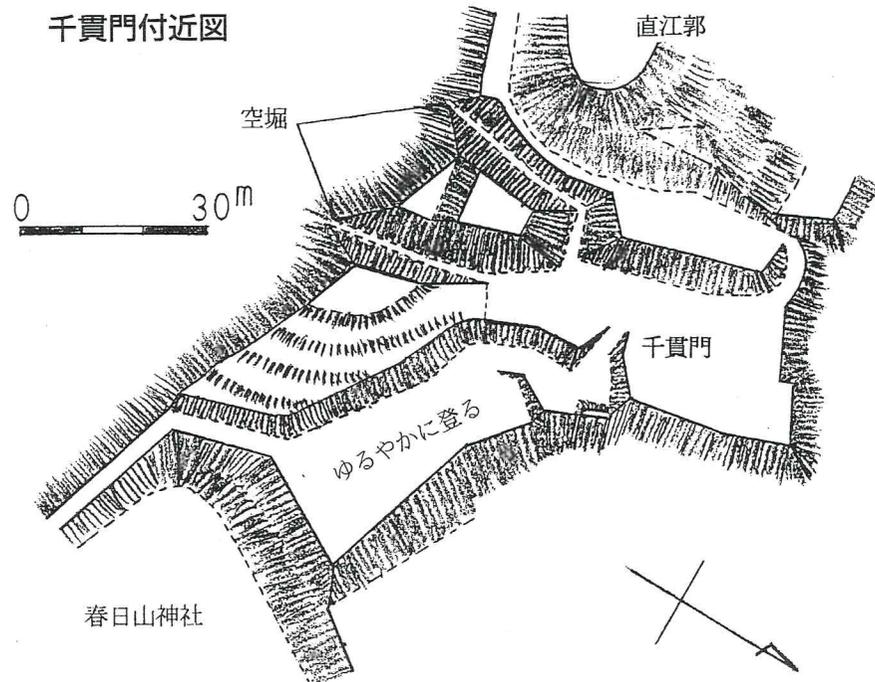
駐車場より階段を登ると春日山神社境内にでる

頸城平野を一望にでき、下段東側には愛宕谷方面（大手方向）からの通路と門があり、西と東側は山を削り残した土塁で囲い、北は一段と高い中城の郭に守られている。

西側の尾根を削り残した土塁上は通路になって（現状は西下の道を上げたため幅が1mから2mと狭くなっている）、中城の千貫門にゆるやかな坂路でつながっている。一方、南の白山尾根につながる最もくびれた部分（現在土産物店がある）には、往時は大きな空堀があり、その先の馬場跡と切り離していたが、春日山神社建立時に資材運搬のため、現謙信公銅像の下を削り取り、堀を埋め立てて道路にしている。往時は、土塁先端（謙信公銅像立地点）は物見の櫓台になっており、春日山神社の郭からは櫓台を通して土塁上を進み、千貫門に至るのが実城への大手道であった。春日山神社境内を中世末の殿館とすると、その背後上部にある二つの郭は大変重要な位置を占めており、上の郭は千貫門への通路を兼ね、下の郭は東側の土塁を通じて殿館とつながり、城内多数の郭の中で、数の少ない小規模な井戸跡らしい凹地も見受けられ、殿館の付属郭と考えられる。後世春日山神社が建立されてからは、神社を見下ろす位置であり、実城へ登る路は東から北へ迂回し、現在の遊歩道に付け替えられている。

春日山神社真上の通路兼用の郭（50m×12m）を通り抜けると千貫門に達する。この付近の郭群を中城と呼び、その中心になる千貫門跡は、古い要害時代に造られた堀切等の構造と一体となった防護施設で、実城（御天城とも呼ぶ）への最も重要な関門となっている。千貫門の名称も最も重要な門ということで名付けられたものであろう。

千貫門を入ると正面は高さ4mの城壁に阻まれ、実城への通路ではないかと思われる正面左への路は、古い堀切を利用したニセ通路であり、本当の通路は右へ迂回して正面城壁上の郭へ登り、そこからは正面急坂を電光石火に登るか、左へぐるっと迂回し帯曲輪を経由して、通称直江郭へ至ることができる。これより上は実城である。



### 実城（御天城）

千貫門わきの二条の空堀と本丸櫓台西下の井戸郭先の二条の空堀の間が、古い要害時代の春日山城（鉢ヶ峰城）で、この区域を実城と位置づける。

実城の中心は本城最高峰（標高約180m）に、近世城郭の本丸天守閣に相当する郭（本書では天守郭）がある。郭の大きさは南北51m、東西17mから20mの矩形に近い形状で、その南より三分の一のところに堀切を設け二区画に分けている。形状から北側の大きい区画には居住用の建物、南側正方形にちかい区画（17m×15m）には天守に相当する櫓が設けられていて、現在も櫓台と呼ばれている。区画する堀切は底幅2m、深さ1.5m程度で通路を兼ね、東側は南の腰郭を通して城内各郭に通じ、西側は6m下の井戸郭に直結している。

井戸郭は長さ35m、幅平均19mで、その中央付近に径6mの大井戸が現存し、本城跡最高峰に近い所であるにもかかわらず、今も水が枯れることがない。

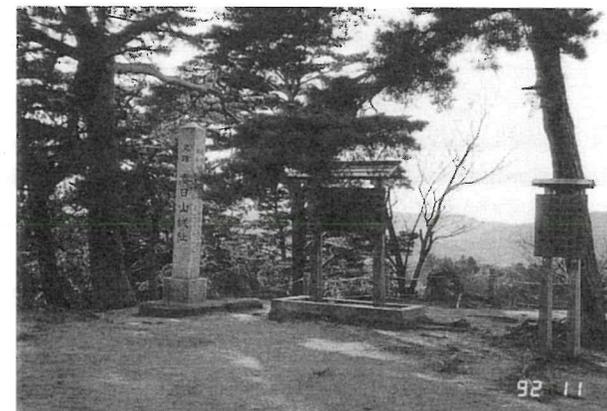
天守郭に付属する郭は、ほぼ北の方向に階段状に三郭設けられており、その内天守郭より5m下の郭には、謙信公信仰の毘沙門天を祀った跡が一段高く残っている。現在はもう一段下の郭に毘沙門堂が建てられている。さらに北に3m下がった郭（幅20m、長さ30m）はお花畑と呼ばれている。以上の井戸郭を含めた五郭が実城の中心で、近世城郭の本丸郭である。

本丸郭への大手の路は、天守郭東側を南からゆるい坂路を兼ねた郭（幅5mから10m、長さ55m）で、その先は毘沙門堂跡の郭につながっている。その中央細くくびれた所に門跡もある。

お花畑から南の方、本丸郭の東側に120m以上にわたって带状に設けられたのが、鉢ヶ峰城時代の二ノ郭で、謙信時代もそのように呼ばれ、実城とその下の景虎郭（当時三ノ郭）とともに、武田信玄亡き後、堀を作るよう命じた郭である。この郭は現在途中で切れているが、後世の崩壊によるものかもしれない。

お花畑から北に向かって10m以上下ると門跡のある郭にでる。ほぼ南北に連なっていた本丸郭群は、ここを接点にして東に向きをかえる。門跡は、この下方中城にある千貫門より規模が小さいが完全な形を残している。門は通称「直江門」と呼ばれているが、春日山城にとっては、東南側から但馬谷が深く切り込み、反対側は東北側から愛宕谷の支流が谷をつくり接しているため、両側は断崖となり、尾根が一番細くくびれて城内を二分する最も重要な所となっている。

このような場所から後世の人が、上杉氏第一の重臣直江氏の名前をつけたのかもしれない。したがって門の前面に連なる長さ90m、最大幅20mの大郭の名称も直江郭となっている。



実城の中心に立つ春日山城趾碑

### 景勝郭

本丸郭の大井戸のある通称井戸郭の西に接して、底幅が2mであるが浅いところで5mの深さをもった空堀と、さらに西に約20mの間隔で底幅4m、深さ6mの空堀が設けられている。この二本の空堀は要害時代に背後の防備のため西から続く尾根を切り離したもので、鉢ヶ峰城の西の端であった。

永禄7年(1564)7月、上田庄の坂戸城主長尾政景が死亡すると、謙信(当時輝虎)は甥にあたる喜平次景勝を養子とし、春日山城にその麾下の上田衆とともに住まわせるため、拡張工事を行った。

謙信は、景勝に丘をけずり平地を三日間で造るよう命じたが、その三日間でお花畑に十倍する平地が出来上がっていたという。これが実城の西に広がる五区画からなる郭群である。

位置としては、本丸櫓台より12m程低いのが、空堀に接する長さ58m、幅25mの郭を中心にして、西から北西方向に階段状に郭を配置し、城壁として高さの足りないところには土塁を設ける等、実城よりは新しい時代の工夫がなされている。その典型は、この郭群を西から南にかけて囲む堀で、堀の底幅は最小でも5mで広いところは13mに及び、堀の城壁高さが3mしかとれないところは、周辺よりも掘り下げ水堀としていたようで、現在でも春には水が溜まり沼地状をなしている。この堀は、北西方向には階段状に伸び、その先では東西方向の横堀と合致し、愛宕谷の方向につながっている。また、もう一方は景勝郭の南側をまわり、東に方向をかえて対馬谷に連なり、春日山城最大級の堀となっている。この堀の南側には65m×55mの御屋敷に次ぐ広さをもつ平地があり、通称柿崎郭と呼ばれている郭がある。

景勝郭の東南側は6m下がって、幅3mから4mの細長い通路状の帯郭が設けられている。この先はその後拡張されたであろう柿崎郭・三ノ丸等を通して対馬谷から登る城道(景勝口)に連なるとともに、途中柿崎郭から分岐して西に向かい、郷津の港に達するお成り街道にもつらなり、景勝郭には堀底路を通して、本丸郭には東南山裾をぐるりと回って二ノ郭に出る重要な路となっている。

### 景虎郭

実城の二ノ郭に小田原北条氏から養子として迎えた北条氏秀(謙信は自分の前名景虎を名乗らせる)を住まわせるため、館を造営したと記録されているのが、二ノ郭の直下に接した郭群である。

二ノ郭からは通路が設けられ、その通路下に長さ25m、幅15mで南谷側に土塁を設けた区画があり、その5m下に南北の長さ63m、幅20mのL字形の大郭がある。この区画の北側三分の一は高さ2m弱の土塁で囲まれた米蔵跡と、残る南側は景虎屋敷跡と伝えられているが、このL字形の構造は城郭構造の虎口跡と考えると、この大郭は景虎直臣の屋敷と米蔵があり、館は一段上の区画と想定するのが適当である。そして北側の沢をへだてた二段の郭も、通路で結ばれた景虎直臣団の居住地であり、これら五区画が景虎郭群といえる。

L字形の虎口から通路状の広場をS字状に下ると、現在の自動車道に至るが、この道路の一部を含めての東斜面に階段状の三区画があり、その北側には浅い沢状の凹地

を隔てて四段からなる区画がある。このうち三段目の区画は但馬谷の最奥の広場と通路につながっており、但馬谷・対馬谷を通して城下に至る重要な登城路となっている。

この路は城に対してほぼ中央の位置にあり、実城に至るには最短距離でもあるので、大手路との説もあるが、林泉寺のある中門前を中心とする愛宕谷が古くからの根小屋地帯であり、上杉氏の後に入府した堀氏もそれを中心に城内外を区画する外堀(監物堀……後掲の春日山城域図参照)を構築したことからも、景虎郭への通路として整備されたのであろう(景虎口)。

### 大土塁状郭群

春日山城の西端は北側から愛宕谷がまわり込み、南側は正善寺谷が深く入り込んでいるが、西から続く尾根は標高150m前後の比較的なだらかな丘陵性の山並みで連なっている。

このような地形は防御上の弱点であるため、それを補い、近世城郭三ノ丸のように多数の家臣団の屋敷地を確保する必要から、尾根を深さ10m以上、底幅4mの大空堀で切り離し、城壁高さの不足するところは土塁を設け、愛宕谷方面と正善寺谷方面には左右に延びる支尾根を利用し、高さ20mにもなる大土塁状に削りだし、その要所に虎口を兼ねた空堀を、各ブロックごとに郭状の広場を設け、監視と防御を厳重にしている。この城壁は延長500m以上になり、中世の城郭には見られないもので、春日山城が近世城郭への移行期の大きな特徴である。

この郭群の中で最も重要な位置を占めているのが、大堀をはさんで景勝郭とほとんど同じ高さで設けられている半径20mの郭を中心とする一群で、ここには宇佐美駿河守邸址の標柱が建っているが、駿河守は実在の人物ではなく、後世の軍記物の中で謙信の参謀として重要な地位を占めた架空の人であるが、この郭の重要性から後世名付けられたものと思う。これらのことから一見して春日山城の西側の守りの指揮所であり、大事な補給路である郷津港へ、また正善寺谷への入り口を押さえる大変重要な郭群であることがわかる。

この宇佐美郭のすぐ南側下には御屋敷に次ぐ広さの通称柿崎郭があるが、この郭の西側は大土塁城壁のすぐ内側であるにもかかわらず、底幅6m、深さ6m、長さ70mに及ぶ大空堀と、その空堀に接する土塁の構造から、ここが謙信時代の城域西端であった期間が相当永く続いたとみられる。



大空堀の斜面

三ノ丸

大土塁城壁に西側を守られ、東西に横断する道路と、東南方向に設けられた虎口に抜ける通路によって三等分されているが、全面積が70,000平方メートルにもなる広い屋敷跡である。ここはほとんどが畑として現在耕作されているが、往時の形状はそのまま残されている。その構造は三分割された各区画の中央に広い中心になる屋敷跡があり、特に南側の二区画には土塁に囲まれた屋敷跡、虎口の存在、複数の広場等から、有力部将を中心にその一党が居住していたことがわかる。

現在東西に通る道は幅3mから4mで、対馬谷から正善寺谷に通じているが、正善寺谷に向かって右側土塁上には、城外を見張る郭が特別に設けられており、かつては正善寺谷方面からの虎口を兼ねた堀跡と考えられる。

南側郭群を二分する通路は、ほとんど直線状に下り、2mの路幅が途中から城外方向に4m幅に変わっている。おそらく、ここに柵門が設けられていた跡で、両側の5



南三ノ丸の土塁 (高さ2m)

m上の郭から攻撃できるようになっているが単純な構造であり、両側の郭群も城外に面する城壁は自然の地形をそのまま利用したもので、一部には区域の定かでない部分もある。これらから、この地域は春日山城として最後に拡張された郭で、年代も新しいことから近世城郭の呼び名である三ノ丸とした。

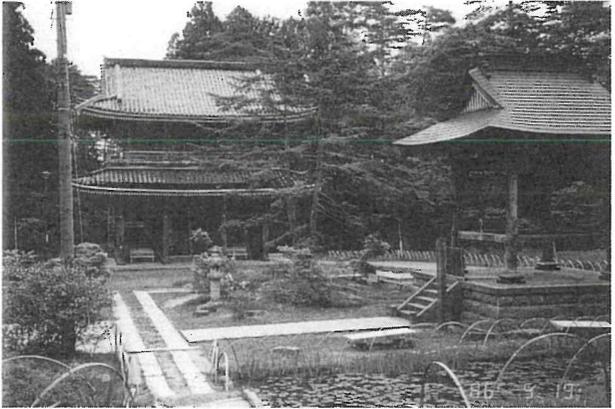
山里郭

大土塁城壁の外側に西から続く尾根の守りとして捨郭状に設けられた郭群で、大空堀の西46mに底幅4m、深さ5m、長さ22mの空堀があり、さらに、その先80mに尾根を断ち切る大空堀を設けている。この堀は春日山城の最も西端のもので、底幅の広いところで5m、愛宕谷の方向には階段状に切り下げていき、正善寺谷の方は山裾まで掘り下げている。その延長は尾根付近で80mになり、山裾まで入れると200mを超える。また、城内側の城壁は5mから6mの高さで、土塁も設けられている。

この二本の空堀の間が山里郭で、堀の間隔80m、最大幅60mの区域に四段に削平地が造られているが、最上段の一部は自然のままであり、ここから山里郭の名称がつけられたのであろうか。

お成り街道

景勝郭の西の堀から横堀を通り、縦堀を渡って幅3mぐらいの路が、標高100mの等高線沿いに北西に450m程進と緩傾斜地の真ん中に出る。そこは10町歩程の広さがあり、昭和の戦後までは段々畑や田で豊かな土地であった。そのほぼ中央を西に向か



愛宕山を通る路の入口の林泉寺

い350m程で春日山城の西端、山里郭から続くゆるやかな尾根の上(標高150m)に出る。ここは南側へ下る路は正善寺谷への分岐点で、番屋が置かれ柵門が設けられていた。さらに北西から北の方向に尾根上を進むと、この街道最高所(標高180m)に設けられた牛池番所に約350mで至る。番所を通り抜け北東方向に約800

m進むと、標高120m付近に設けられた宮野尾門に着く。ここは林泉寺裏から愛宕山を通る路と交わる場所で、春日山城の外郭搦手門に相当するところである。ここから日本海に向けての北西斜面はゆるやかで、段々田んぼが広がっている。その中を北の方向に約1,000m下ると岩戸川のほとりに出、川沿いに約550mで郷津港に達する。

この道の行程は全延長ほぼ3,500mで、勾配も急なところで平均して15%で、往時の歩行者、馬などにはそれほど困難な道路ではなかった。

郷津の地名は「国府の津」から転訛したものとされているように、古くから明治時代まで二百石船以上の船がこの港に入っていた。日本海の港は西または北西方向からの風と波を防ぐ場所が最適地であり、番神岬に囲まれた柏崎港が最も栄えたのはそのためである。

郷津海岸は現在沖の方に岩礁が見え隠れするだけであるが、かつては岬が沖合の夫婦岩まで突き出た天然の入江であり、立派な船溜まりであったであろう。謙信時代はこの港を監視するため、背後の岩殿山に沖見(船見)城を設け、春日山城の港として機能させていた。したがって春日山城は正面から攻撃を受けても、この港があるかぎり補給も十分できる体制であり、上杉謙信が京へ上った時、また、越中、能登と軍を動かしたときは、すべてこの道から出発したのである。



五智海岸から見た郷津岬(岩戸の崎)

この道は、城の背後の山中を通るにもかかわらず、道の両側には段々田んぼが開け、その面積は38町歩、正善寺川の右岸までを入れると50町歩にもなる。この田畑は隠し田で、城内に住む人たちが耕し、籠城の際には一部自給することができる心強い田畑である。

### 春日山城調査あとがき

新潟県内の城跡等の調査・図面作りをはじめ、特に上杉氏番城のすべての調査のめどがついたときが、本城である春日山城の調査開始と考えていた。すなわち、戦国時代の国盗りと同じく、周辺の支城を一つ一つ落とし、最後が本城の攻撃をするのと同じで、その気持ちのたかぶりは表現できないものがある。

勤務地や住所の関係から、南魚沼郡六日町の坂戸城から始め、魚沼地方の城を踏破し、中越の栖吉城から下越の各城、そして北条城を代表とする柏崎周辺の城と、米山峠以北をほぼ終わって、腰を据えて上越（府内）の春日山にとりかかった。

城跡の調査は、藪や灌木の茂ったなかを、かつての城壁を上下するので、適期は雪解け後の4月から5月中旬の限られた期間であり、休日の利用と天候の具合から年に三城が限度であった。

春日山城は規模も大きく、奥深く、どれだけの期間が必要か判らなかったが、目標期間は一年間とした。そのためには条件の良い4月から5月にこだわってられない。幸いにも城内の主要部分（実際はごく一部であった）が公園として整備され、遊歩道もつけられているので、平成4年の秋10月から現地へ入ることにした。

これだけの広大な地域を図面にまとめるには、しっかりした基線が必要であり、年内には遊歩道周辺の御屋敷・中城・実城等と、遊歩道から離れた景勝郭以西を含めた調査の基線となるトラバースを組むことにした。

トラバース測量とは、ある地域を測量する場合の骨組みの一種で、距離と方向の角度で測点と基線を決め、最後に出発点に戻る閉合トラバースの場合は、誤差がはつきりし、正確さも判明する。今回の春日山の場合は1/2,500の縮尺で図化するので、1mの誤差が図面上で0.4mmと線の太さ程になるので、精密な測量は必要としない。従って今回は歩測と、方向は1/5,000地形図を参考にして進めたが、ほとんど誤差なく閉合した。

幸いにも、この年は晩秋の天気も良く、冬の降雪期間中も非常に雪の少ない年で、作業は順調に進んだ。しかし、その反面四月春になっても天候は定まらず、4月10日には朝から曇っていた天候が11時頃から雪になり、小一時間程で止んだが、12時頃からの雲間から射し込む太陽によって、雪が溶けると共に霧の立ちのぼる様子は静寂のなかに音をたててのようで、その景色は素晴らしい眺めであった。昼の弁当を食べるにも座る場所がなく、この景色を眺めながらの立ち食いであったが、天気悪さを忘れさすひとときであった。

城跡の調査をしていると時々霊気を感じることもある。それは、あまりにも静か過ぎて周辺の立木から感ずることもあるが、春日山の場合は3月27日15時頃景勝郭の杉林の中を調査中、朝からの好天が、突然一陣の風が吹き、径50cm以上の杉の木がギシギシミシミシ音をたて揺れはじめ、背筋に冷たいものが走り、早々にその場を立ち去ったが、後で気がついたら、その時初めて持っていった万歩計が無くなっていたという不思議な現象もあった。おそらく、あわてたので落としたのであろうが、何かを残してきたことで気持ちの落ち着きになったことはたしかであった。

いろいろなことがあったが一応予定通り現地調査を終え、夏のあいだに図面化し、平成5年初秋に完成したのが春日山城跡図である。

